文藝春秋4月号

KIT
キャンパス
レポート 302

文・杉村裕之

ロボットに熱中の半生。失敗から会得した技術哲学。

田中 悠太（たなか ゆうた）
金沢工業大学
工学部
ロボティクス学科四年
福島県立小高産業技術高等学校出身

大きな夢を描くことは青春の特権だ。ただ、風呂敷を広げっ放しにせず、実現の頂きをめざす努力をうまずたゆまずできるかどうかで、人生の見える景色は変わる。

ロボットと向き合う田中さんは、その模範生のような若者だ。アパートに帰れば、卓上用のNCフライス盤や電動ドリルなど多彩な工具を駆使してモノ作りに熱中する。

生まれた環境と人間形成の強い相関を思わずにはいられない。幼い頃から機械油の匂いを身近に感じて育った。父も祖父も工作機械を製造する現場で働き、休日、よく工場に連れていってもらった。中学生になると、ゲームに興じる同級生を横目に、小遣いで買ったボール盤や糸ノコでおもちゃを作るのが楽しくて仕方なかった。

高校はロボットに不可欠な電子制御を学びたいと、工業系を選択した。ロボット研究部に所属し、一年生の時、工業高校対象のロボコン全国大会にも出場した。ところが、同大会の上位入賞を期した二年、三年生と、いずれも県予選で敗退した。思えば、この経験が彼の技術哲学になったかもしれない。

「マシンの理想を追い求めるあまり、現実を冷静に見る目が欠けていました。理論的に完璧でも、部品が壊れたら勝負になりません。信頼性や安全性がいかに重要かを思い知らされました」

不完全燃焼の悔しさをぶつけるため、ABUロボコンで世界一に輝いた夢考房ロボットプロジェクトのあるKITに進学した。そして、二年次には同プロジェクト回路班の学年リーダーで活躍したが、学業に響いてリタイアの憂き目に。

またも無念を飲んだ彼に、指導する出村公成教授が声をかけた。経済産業省などがコンビニの人手不足解消を支援する自律移動ロボットの競技会に、出村研究室チームの一員として加わらないかと誘った。田中さんはロボットの設計と開発、陳列タスクの制御と回路を担当し、昨年十一月の大会で断トツの成績を出し、出村先生をして「優勝の原動力」と言わしめた。

「大会前の二週間は徹夜で作業しました。最も気をつけたのは壊れにくく、修理がしやすいことで、性能より動作の安定性を第一に考えました」。無理な背伸びをしない堅実な作戦が勝因だったわけだ。

まだ夢の一合目かもしれないが、新潟県長岡市にある太陽工機で四月から、日々、技術の高みをめざす登山が始まる。地に足のついたエンジニア一年生に、変な気負いも焦りもない。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七-一
電話番号（〇七六）二四八-二〇〇